

江戸時代 大百科

2

江戸の町と人々の暮らし

監修：小酒井大悟 東京都江戸東京博物館 学芸員



ポプラ社

上水の整備



江戸っ子は「水道の水を産湯(生まれたばかりの子を洗う湯)につかった」ことを、都会生まれの象徴としてじまんしました。当時、江戸には世界でも最大規模の水道の設備がありました。

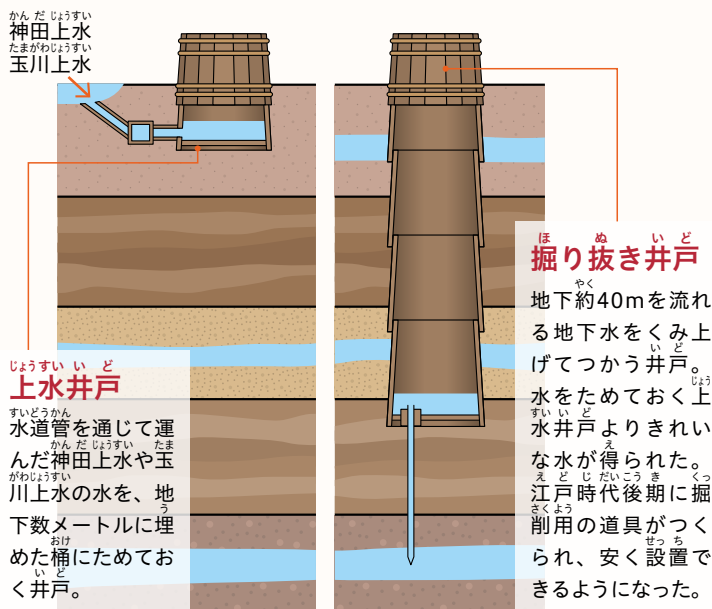
◆多くの人の生活をささえた上水

江戸では、飲み水をはじめとする生活用水の確保が大きな課題でした。海に近く、湿地を埋め立てて整備されたことから、井戸を掘っても海水の混ざった塩水しか得られなかったためです。江戸幕府が開かれた当初は小規模な上水があるだけでしたが、数十年後には神田上水が整備されました。

その後、人口の増加とともに水が不足するようになると、幕府は1653年に開いた玉川上水をはじめ、多くの上水を引いて水の確保につとめました。これらの上水の水は、地下にはりめぐらされた木樋などの水道管によって各地の井戸へ運ばれました。水道管の総延長は約150kmにもおよ

上水井戸と掘り抜き井戸

掘り抜き井戸が広まる江戸時代後期まで、江戸ではおもに上水の水を利用する上水井戸がつかわれていた。



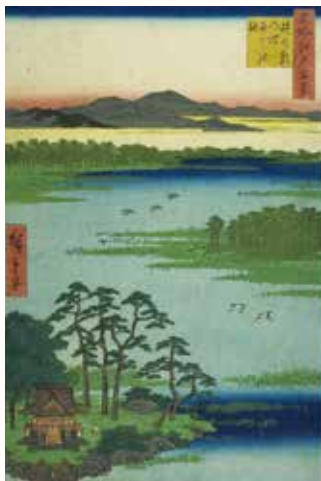
江戸東京博物館「常設展示図録〔図表編〕」(2017年)「上水と井戸」をもとに作成

び、世界最大の規模をほこっていました。

江戸時代後期になると、地下水をくみあげてつかう掘り抜き井戸が広まりました。掘り抜き井戸では、上水をためておく上水井戸よりきれいな水が得られました。

江戸中にはりめぐらされた水道

江戸には神田上水、玉川上水、亀有上水、青山上水、三田上水、千川上水の6つの上水が引かれた。なかでも神田上水と玉川上水は江戸の二大上水として、それぞれ江戸中心部の北部と南部でつかわれた。神田上水と玉川上水以外の上水は1722年に廃止された。



玉川上水(1653年開設)
多摩川の水を羽村(現在の東京都羽村市)で引き込み、四谷(現在の東京都新宿区)まで約43キロメートルにわたって通水させた大規模な上水。現在も一部がつかわれている。

江戸時代末期にえがかれた井の頭池。武蔵野台地で最大の湧水池で、神田上水のおもな水源となった。
歌川広重「名所江戸百景 井の頭の池 井天の社」シカゴ美術館 蔵



東京都港区にあった仙台藩(宮城県)の藩邸跡で見つかった上水の跡。地中に木でできた樋(水を通すための管)がはりめぐらされていた。
写真提供 東京都教育委員会



江戸に玉川上水を引いた 玉川庄右衛門・清右衛門

玉川上水は、玉川庄右衛門・清右衛門によって整備されました。幕府に工事をまかされた2人は、2度の失敗や、資金が足りなくなるなどの苦労を経て、わずか8か月で玉川上水を江戸の四谷まで通しました。高度な土木工事や測量の技術によって整備された玉川上水は、今も一部が東京都の水道施設として活用されています。



東京都羽村市にある、玉川庄右衛門・清右衛門の像。

神田上水

(寛永年間(1624~1645年)ごろ開設)

井の頭池(現在の東京都三鷹市)と善福寺池、妙正寺池の水を水源とする。明治時代の1901年までつかわれた。

千川上水

(1696年開設)

玉川上水の流れを分けてつくられた。現在の文京区や台東区などでつかわれた。

神田上水懸樋。神田上水の水を、神田川をまたいで通すためにかけられた樋。東京の「水道橋」という地名は、この懸樋が由来となっている。

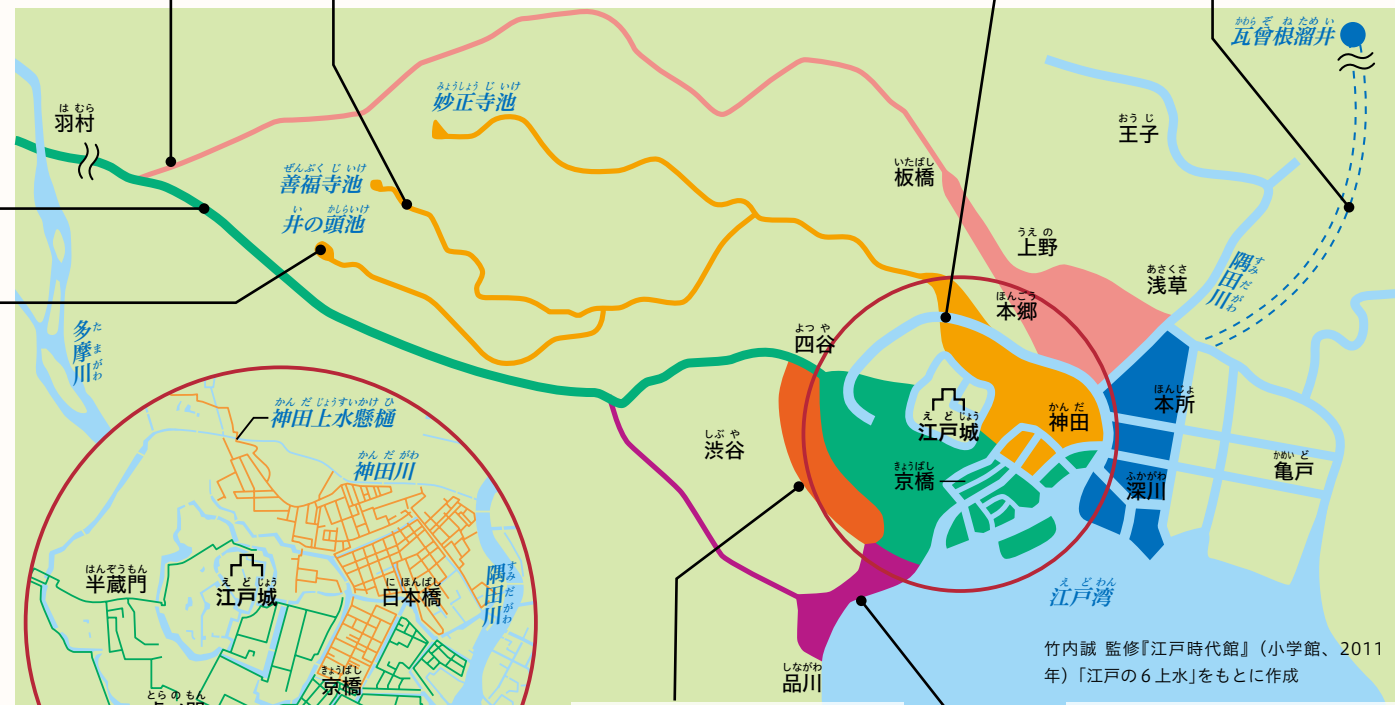


歌川広重「東都名所 御茶之水之図」シカゴ美術館 蔵

亀有(本所)上水

(1659年開設)

利根川の支流、綾瀬川から引かれ、隅田川東岸でつかわれた。



青山上水

(1660年開設)
玉川上水から水の流れを分けてつくられた。青山や赤坂など、現在の港区を中心につかわれた。

三田上水

(1664年開設)
玉川上水から水の流れを分けてつくられた。現在の世田谷区や渋谷区、港区などでつかわれた。

地図の見方

神田上水	亀有(本所)上水	三田上水
玉川上水	青山上水	千川上水

江戸の町の中心部には、細かく上水道がはりめぐらされていた。北部はおもに神田上水、南部はおもに玉川上水の水をつかった。
江戸東京博物館「常設展示図録〔図表編〕」(2017年)「江戸府内上水使用分布図」をもとに作成

武士を中心とした町づくり



江戸に幕府が開かれてすぐ、江戸城の築城と城下町(城を中心につくられた町)の整備が進められました。完成した城下町は、江戸城を中心とする要塞のような町でした。

江戸城を守るための町づくり

1635年、3代将軍家光は武家諸法度を改め、大名が領地と江戸を1年ごとに行き来する参勤交代の制度を定めました。参勤交代をきっかけに、すべての大名に江戸でくらすための土地があたえられ、大名とその家族、家臣がくらすための大名屋敷が次々と建てられました。

これらの大名屋敷や、旗本がくらす旗本屋敷などの武家屋敷は、江戸城を取り囲むように配置さ

れました。同じ時期に、城の外堀の工事も進められました。江戸に攻めこまれても対応できるよう、守りを固めたのです。

町づくりが進むにつれて、工事をになう職人や、武士のくらしを支える商人など、町人の人口も増えていきました。江戸城の東には、武士がくらす武家地をはさみ、町人がくらす町人地がつくられました。こうして1640年代には、江戸は江戸城と武家地を中心とする城下町として、一度完成したのです。

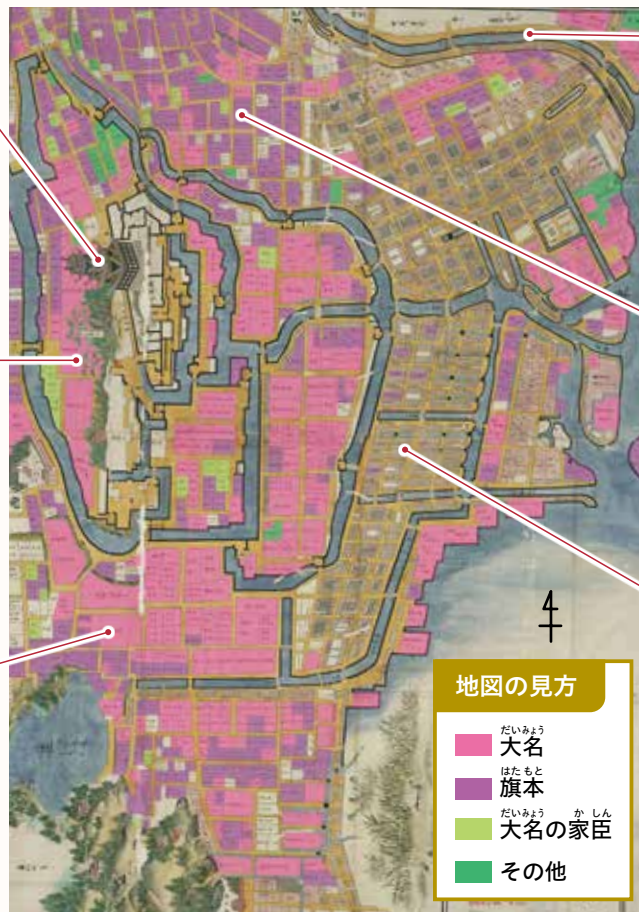
17世紀初めごろの江戸

1632年にえがかれた江戸の町。幕府が開かれてから約30年で、武士を中心とする城下町に発展した。

江戸城
幕府が開かれた1603年に本格的な改築がはじまり、家光が将軍だった1636年に完成した。工事には全国の大名が動員された。

親藩・譜代大名の屋敷
江戸城の周辺には、尾張徳川家、紀伊徳川家、水戸徳川家をはじめとする親藩大名や譜代大名(→1巻)の大名屋敷が置かれた。

外様大名の屋敷
江戸城の南にあたる外桜田門や霞が関、永田町には、米沢藩上杉家や仙台藩伊達家などの有力な外様大名(→1巻)の大名屋敷が置かれた。



外堀
江戸城の外堀。1636年に完成した。多くの橋とともに、見附とよばれる見はりのための門が置かれた。

旗本屋敷
江戸城の北には旗本の屋敷が置かれ、江戸城の守りをになった。

町人地
日本橋や京橋には、町人がくらす町人地がもうけられた。全国から職人や商人が集まった。

江戸東京博物館『常設展示図録 [図表編]』(2017年)「寛永期の武家地」をもとに作成
「武州豊嶋郡江戸庄園」東京都立図書館特別文庫室 蔵を加工

福井藩松平家の大名屋敷

大名屋敷は大名やその妻子、家臣たちの住まいであるとともに、将軍や他の大名をもてなす場でもあり、非常に華やかなものだった。明暦の大火(→P.12)の後、質素なつくりになった。

大広間



▲金箔や絵画で飾られた大広間。

御成書院

将軍が大名屋敷を訪れたときに、将軍の居間や対面の場所としてつかわれた。

矢倉

見はりのための建物。この大名屋敷では四方の角にもうけられている。

庭園

将軍や他の大名などが屋敷を訪れたときにもてなせるよう、豪華な庭園がつけられた。

能舞台



▲江戸時代、能は重要な儀式のときに催される芸能だった。そのため大名をはじめ、武士は教養として能をたしなんでいた。

黒書院

大名が居間としてつかったり、家来や親しい客と対面したりした場所。

長屋

大名に仕える武士たちの住まい。数百から千人ほどの武士たちがくらしていた。→P.21

大台所

大名屋敷にくらす人々の食事を用意した場所。

居間

土蔵

物置

ながや長屋

玄関

台所門

藩主が出入りした門。

▲親藩である福井藩松平家の大名屋敷。江戸城本丸の大手門の前にあったが、明暦の大火で焼失した。

御成門



▲「御成」とよばれる、将軍が大名屋敷を訪れるときのみ使われる門。大名たちは将軍への歓迎の気持ちを表すため、この門の華やかさを競った。

「福井藩江戸上屋敷CG映像」福井県制作映像をもとに加工

火事が変えた町のすがた



江戸幕府が開かれてから約50年後の1657年におこった明暦の大火とよばれる火事は、江戸の町の大部分を焼きつくし、その後の町のすがたやしくみを大きく変えました。

江戸は火事の町

江戸では「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるほど、火事がよくおこりました。江戸の町の大半を焼きつくす大規模な火事だけでも、江戸時代を通して10件以上おこったとされます。

大規模な火災がたびたびおこった原因は、当時は建物の多くが燃えやすい木造だったこと、冬に強い季節風が吹くこと、そして江戸の人口密度が高かったことにあります。町人たちは密集した長屋でくらし、そこで火災が発生すると、火

がすぐに燃え移り、かんたんには消火できなかったのです。

このようにして発生した火事のうち、1657年の明暦の大火は、江戸の町の大半を焼きつくし、多くの死者を出したことから、江戸時代最大の火事として知られています。



▶明暦の大火のようす。消火にあたっているのは、大名が消火の指揮をとる大名火消。1641年の桶町火事の後、江戸城や武家屋敷、その周辺を守るために16家の大名が大名火消に任命され、消火にあたっていた。
田代幸春「江戸火事図巻」江戸東京博物館 蔵

江戸でおこったおもな火事

大規模な火災では、数千、数万人の死者が出たこともあった。ここにあげていない小さな火事も多く、江戸時代を通じて江戸では2000件の火事がおこったという説もある。

年	火事	火元	被害
1641年	おけちや 桶町火事	きょうばしおけちや 京橋桶町	死者数百人。江戸で最初の大規模な火事とされる。大名火消を設置するきっかけとなった。
1657年	めいれき たいか 明暦の大火	ほんごうまるやま 本郷丸山など	江戸の町の6割が焼け、江戸城の本丸も焼失。死者は3～10万人といわれ、江戸時代で最大の被害を出した火事とされる。
1698年	ちんがく 勅額火事	しんばしあかねべやう 新橋南鍋町	せんじや 千住(⇒P.17)まで焼けた。大名・旗本の屋敷合わせて300軒焼失。町屋約2万棟焼失。上野の寛永寺(⇒P.37)中堂が焼失。
1703年	みとさまか 水戸様火事	こいしかわ 小石川(⇒P.17)の水戸藩邸	ほんごう 本郷(⇒P.17)や浅草のほか、両国橋を焼いて本所、深川(⇒P.17)まで焼けた。大名屋敷約300軒、町屋約2万棟が焼失。
1772年	めくろ 目黒行人坂の大火	めくろ 目黒行人坂の大円寺	ぬす 盗みを目的に、僧侶が火をつけたとされる。日本橋から千住まで焼けた。死者・行方不明者合わせて約1万8000人。
1806年	ぶんか 文化丙寅火事	しば 芝車町	きょうばし 京橋、日本橋、神田、浅草の1帯が焼けた。死者1000人以上。
1829年	ぶんせい 文政の大火	かんだ 神田佐久間町の材木小屋	にほんばし 日本橋、京橋、芝の1帯が焼けた。死者約2800人。
1855年	じしん 地震火事	(20か所以上)	あんせい 安政江戸地震により各地で出火。死者約3800人。

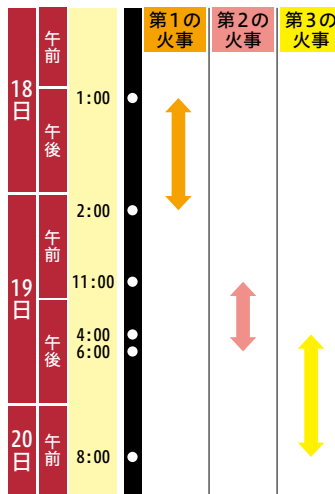
明暦の大火による被害

明暦の大火とよばれているのは、江戸で1657年1月18～20日におこった3件の火事。雨が降らない日が80日以上続いて乾燥していたこともあり、火はまたたくまに燃え広がり、市街地の約6割が焼失した。



火事の発生と鎮火の時刻

3件の火事は1月18日から20日にかけて、それぞれ別の場所で、立て続けにおこった。



▶出島のオランダ商館長(⇒5巻)とともに江戸をおとずれていた外国人がえがいた、日本橋周辺の被害のようす。一面が焼け野原となっている。
「1657年3月4日火事にあった江戸市街の図」江戸東京博物館 蔵



第2章 江戸の人々と暮らし

町の広がりと言口増加

1657年におこった明暦の大火後、江戸の町は復興とともにその範囲を広げ、世界でも有数の大規模な都市へと成長しました。

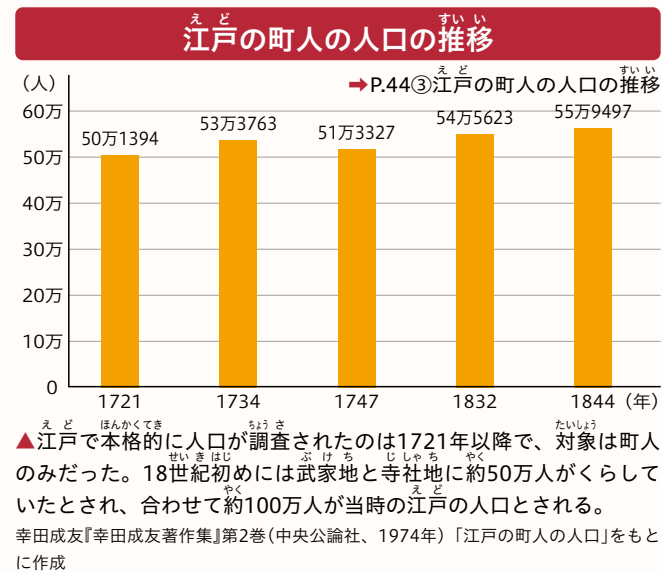
◆100万人がくらす大都市

江戸で明暦の大火からの復興が進められた時期は、全国的に陸上や海上の交通網が発達し、ものの売り買いが地域をまたいでさかんにおこなわれるようになった時期でもありました。武士や、その生活を支える商人や職人が集まる江戸は国内最大の消費地で、大坂などから多くの物資が運ばれてきました。江戸は全国的な物流の拠点のひとつとなり、物流にたずさわる商人や労働者の数も増えていきました。

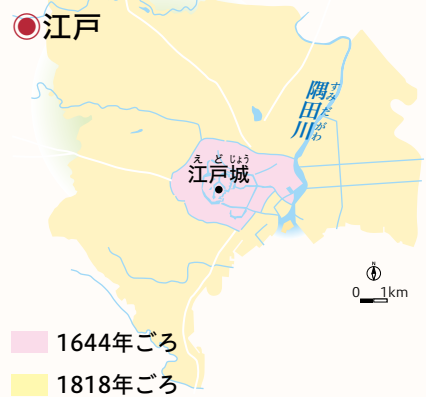
18世紀初めには、町人の人口は約50万人に、江戸全体の人口は約100万人に達したとされます。江戸の町の範囲も、明暦の大火がおこったこ

ろの約4倍にまで広がりました。

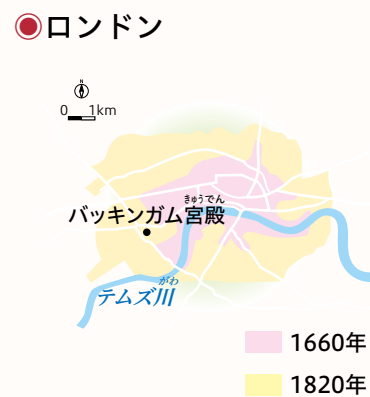
世界有数の大都市となった江戸では娯楽や行事もさかんになり、文化の中心地としても発展していきました。



江戸と世界の都市の広がり



大石学『r. 日本の歴史5 天下泰平のしくみ 江戸時代』(小学館、2011年)「大きくなる江戸の町」をもとに作成

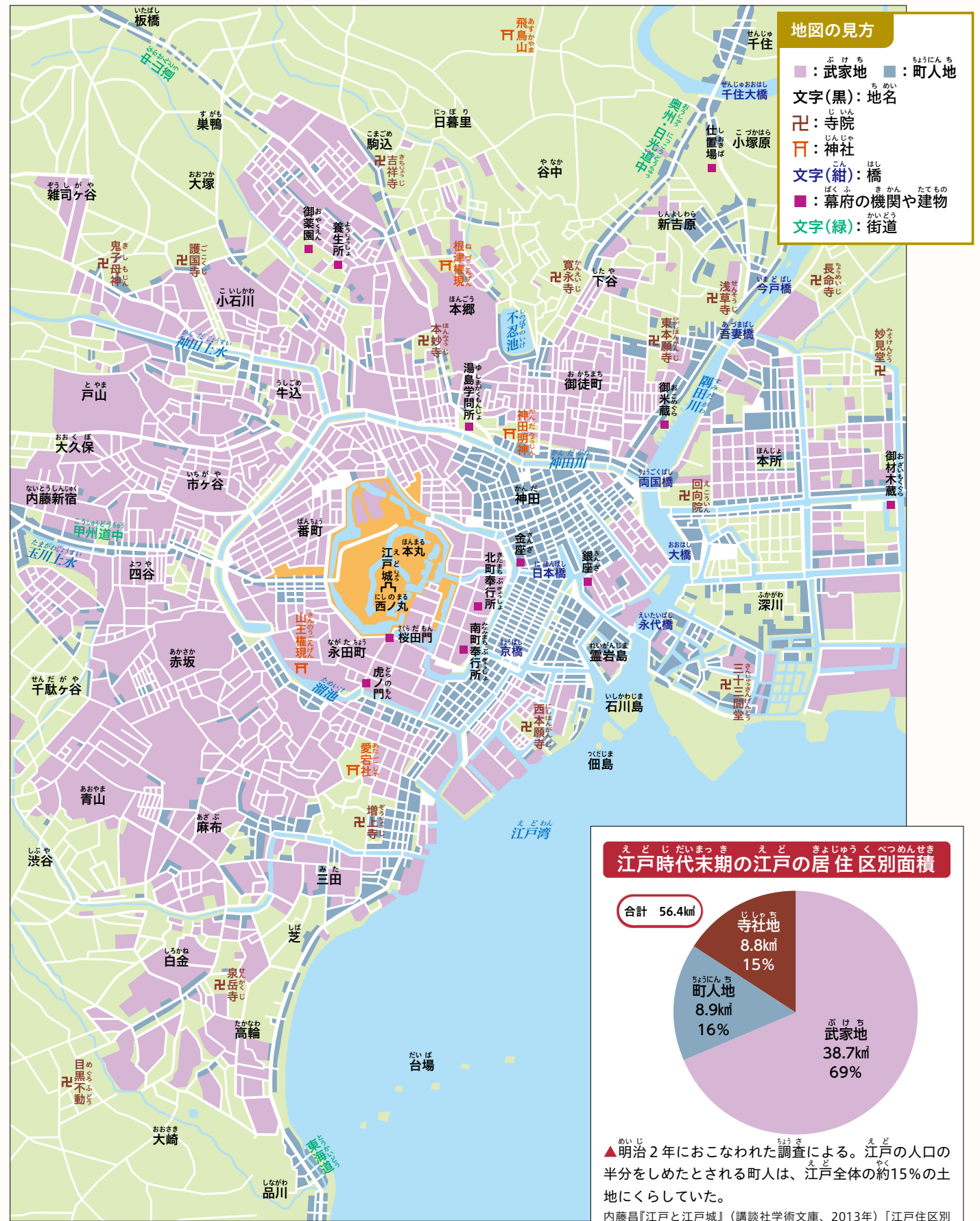


ジム・アントニュー『復元透し図 世界の都市』(三省堂、1995年)をもとに作成



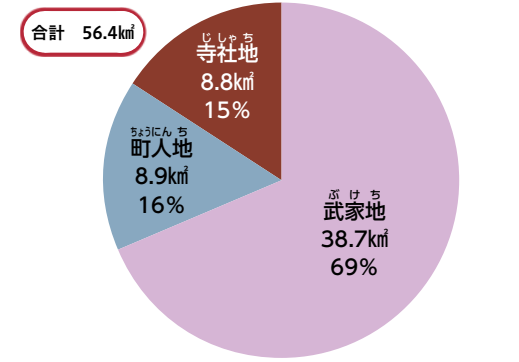
ジム・アントニュー『復元透し図 世界の都市』(三省堂、1995年)をもとに作成

19世紀半ばごろの江戸の町



竹内誠 監修『一目でわかる江戸時代一地図・グラフ・図解でみる』(小学館、2011年)「江戸の町の拡大」、内藤昌『江戸と江戸城』(講談社学術文庫、2013年)「第V期 嘉永2年・1849〜慶応元年・1865」などをもとに作成

江戸時代末期の江戸の居住区別面積



▲明治2年におこなわれた調査による。江戸の人口の半分をしめたとされる町人は、江戸全体の約15%の土地にくらしていた。
内藤昌『江戸と江戸城』(講談社学術文庫、2013年)「江戸住区別面積表」をもとに作成